

化政文化

古墳

飛鳥

奈良

平安

鎌倉

室町

安土桃山

江戸

明治

今日の問い

江戸時代後期の文化は、どのような人々によって、どのように楽しまれたのだろうか。

読み終えたら、最後の「問いへの答え」を見る前に、自分の言葉で答えてみよう。

1 化政文化と庶民の文学

文学と俳諧

かせいぶんか
化政文化

19世紀初め、江戸の町人を中心に栄えた文化。

じっぺんしゃいっく
十返舎一九

「東海道中膝栗毛」を書いた滑稽本の作者。

こばやしっさ
小林一茶

農村の暮らしや小さな生き物をよんだ俳人。

19世紀の初め、文化・文政の年号のころを中心に、江戸の町人をにない手とする**化政文化**が栄えた。**十返舎一九**が弥次さん・喜多さんの旅をこっけいに描いた「東海道中膝栗毛」などの滑稽本が人気を集め、**曲亭馬琴**（**きょくていばきん**）（滝沢馬琴）の「南総里見八犬伝」も広く読まれた。

寺子屋で読み書きを学んだ人が増え、本を安く借りられる貸本屋も広まったことが、こうした出版を支えた。

世の中や政治を皮肉やこっけいをまじえてよむ**川柳**（5・7・5）や**狂歌**（5・7・5・7・7）が流行した。俳諧（俳句）では、画家でもあった**与謝蕪村**が絵のような情景の句をよみ、**小林一茶**は農村の暮らしや小さな生き物をよんだ、親しみやすい句を多く残した。

2 浮世絵と庶民の楽しみ

浮世絵と行楽

にしきえ
錦絵

多色刷りの浮世絵の版画。

かつしかほくさい
葛飾北斎

「富嶽三十六景」を描いた浮世絵師。

うたがわひろしげ
歌川広重

「東海道五十三次」を描いた浮世絵師。

多色刷りの版画である**錦絵**が大量に刷られ、安く売られたため、浮世絵は庶民にも広まった。**喜多川歌麿**は美人画で人気を集め、**葛飾北斎**の「富嶽三十六景」や**歌川広重**の「東海道五十三次」など、各地の風景を描いた作品も多くつくられた。

町人は**歌舞伎**の芝居見物や、落語などを楽しむ**寄席**に出かけ、人気の役者を描いた浮世絵も買い求めた。また、街道などの交通が整うと、**伊勢参り**などの寺社参りを名目に旅に出る庶民も増え、名所の案内書や広重の風景画が旅への関心を高めた。旅人や出版物を通して、江戸の文化は地方にも広がっていった。

絵師	代表作
喜多川歌麿	美人画
葛飾北斎	「富嶽三十六景」
歌川広重	「東海道五十三次」

問いへの答え

江戸時代後期の化政文化は、19世紀初めに江戸の町人をにない手として栄えた。十返舎一九の滑稽本や、世の中を皮肉る川柳・狂歌が親しまれ、俳諧では与謝蕪村や小林一茶が活躍した。安く売られた錦絵によって浮世絵も庶民に広まり、人々は歌舞伎や寄席、伊勢参りなどの旅を楽しんだ。こうした文化は、旅人や出版物を通して地方にも広がった。

次は ノート で、下線に語句を書きながら確かめよう →

